

< 記念講演 >

「アジアから問う真理<サッティヤ> ——ガーンディーの非暴力運動が提起したもの——」

長崎 暢子

19 世紀後半のアジアにおいては、英仏蘭などヨーロッパ諸国の帝国主義化というかたちで、アジアの視点からは植民地支配というかたちで、グローバル化が進行しつつあった。

インドでは、この植民地支配から離脱するべく、民族独立運動が展開された。とりわけ M. K. ガーンディー (1869-1948) が指導した運動は、非暴力を堅持しつつ、諸言語を駆使して英国との交渉を続け、1947 年ついにインド独立を達成したことで知られる。アジアにおける国民国家システム成立の重要な契機となったこの運動は、「真理<サッティヤ>を、堅持し、主張する<アグラハ>運動」と名付けられた。ここではガーンディーの運動が提起した真理の内容とそれを堅持する非暴力運動の方法をとりあげ、その有効性について考える。

問題の所在と歴史的背景：ガーンディーは明治維新の一年前、スエズ運河開通の年にインド西部のポールバンドルという港町に生まれた。かつて、この地域は多元的・多文化的交易で有名なインド洋交易圏に属していた。しかし当時のインドは植民地支配という形でグローバルの波に組み込まれつつあった。最後の抵抗（大反乱）に敗北したムガル帝国が崩壊（1858 年）した後、英領インドが正式に成立する（1877 年）。ところが植民地支配のもと、インドからは「富の流出」が進行し、飢饉や疫病、反乱が頻発し、人々の危機感が高まるものの、先の見えない状態が続いたのである。

対英協力のなかの自立と変革—初期インド国民会議のインド人指導者たち：このころ、イギリス人自由主義者の A.O.ヒュームなどの尽力により、英人を交えた国民会議（1885 年）が成立した。国民会議は、インド人の意見を請願、決議、勧告など穏健なかたちで英政府・議会に伝達する機関であったが、のちに独立運動の指導組織と化す。インド人エリートたちは、公共圏においては英語使用を前提としており、その意味でイギリス文化圏に協力的でコミュニケーションは円滑だった。ナオロージーの「富の流出論」、ガーンディーの「ヒンド・スワラージ」、タゴールの「ギタンジャリ（ノーベル賞受賞作品）」など、当時のインド人の代表的・自立的見解は、全て自らの手による英語で発信された。そのため英語圏の人々とのコミュニケーションはレベルが高く、深い相互理解が実現した。

異文化のなかの公共圏形成—南アフリカのインド人公民権運動：ガンディーは21年間弁護士として南アフリカに滞在したが、同地のインド人人権剥奪反対運動を組織し、同地域のインド人移民労働者への奴隷労働に等しい差別的待遇を最終的には撤回させた。この運動は異文化のなかで差別された少数派の側から公共圏を作り出す試みであり、そこから非暴力と英語を軸とする多言語コミュニケーションという方法が生み出された。

非暴力運動と「真理・真実」：上記の運動の名前は「サッティヤグラハ＝真理を堅持し、主張する」と名付けられた。ここでの真理は、「移民労働者にも公民権を」から出発し、インドの「帝国支配から国民国家への離脱」を意味するものに発展した。この発表ではその真理の概念が、何故、どのようにして非暴力と結びついたかを説明したい。

<長崎暢子氏の紹介>

龍谷大学 現代インド研究センター（現代インド地域研究拠点）センター長

（主要著作）

『サリーの女たち』（共著）1975年、評論社

『南アジアの民族運動と日本』（編）1979年、アジア経済研究所

『インド大反乱』1981年、中央公論社

『インド独立 — 逆光の中のチャンドラ・ボース — 』1989年、朝日新聞社

『現代アジア論の名著』（編共著）1992年、中央公論社

『ガンディー — 反近代の実験 — 』1996年、岩波書店

『自立へ向かうアジア』（共著）1999年、中央公論新社（世界の歴史 27巻）

『タゴールとガンディー再発見』（共著）2002年、法蔵館

『現代南アジア1 地域研究への招待』（編著）2002年、東京大学出版会

『南アジア史』（辛島昇編、共著）2004年、山川出版社

『インド：国境を越えるナショナリズム』2004年、岩波書店

Democracy and Development in South Asia: East Asian Comparative Perspectives,

Ryukoku University, Kyoto, 2005（編）

The International Context of Conflicts in the Middle East and Asian Approaches to

Conflict Resolution, Ryukoku University, Kyoto, 2006（共編）

『資料集：インド国民軍関係者聞き書き』（共編）2008年、研文出版

『資料集：インド国民軍関係者証言』（共編）2008年、研文出版

『自立へ向かうアジア』（共著）2009年、中央公論新社（世界の歴史 27巻）

『紛争解決 — 暴力と非暴力 — 』（共編）2010年、ミネルヴァ書房（アフラシア叢書1）

「初期国民会議派とインド・ナショナリズム — 協力の中の自立と変革」 岩波講座『東アジア近現代通史2 日露戦争と韓国併合：19世紀末 — 1900年代』所収、2010年